Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-05

# イントロダクション(特集:投影像、あるいは脱身体のユートピア？)

居村, 匠

(Citation)
美学芸術学論集,12:60-61

(Issue Date)
2016-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009439

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009439

# イントロダクション
## Introduction

居村匠
Takumi IMURA

音響機器、映像機器を用いたインスタレーションは、今日の美術館、ギャラリーにおいて広く見られるものである。とくに、壁やスクリーンにプロジェクターを用いて直接イメージを投影する手法は、美術展示のごく一般的形態になっているとさえ言えるかもしれない。この投影されたイメージ（＝投影像 projected images）の遍在は、今日の私たちの作品鑑賞の経験をひどく居心地の悪いものにしている。ひとつには、多くの投影像作品はあまりに長すぎる。それは鑑賞のフローをせき止め、私たちを拘束する。また、展示空間において観者の有無にかかわらず上映されつづける超長編の映像作品は、いよいよ作品全体の把握を許さないものとなっている。このような作品を前に、私たちは作品から疎外されるような感覚を覚え、戸惑いを感じる。この作品と観者との懸隔は、一方でモダニズム絵画における自律性（とそれによる遅れてくるものとしての観者）とも、他方で演劇性（マイケル・フリード）とも異なるものであろう。

投影像について、二〇〇三年に『オクトーバー〔*October*〕』誌上でラウンド・テーブルが組まれた。その争点のひとつは、現在の投影像と一九六〇―七〇年代のそれとの連続性をめぐるものだった。そこには一方で、投影像は展示されている物理的空間とかかわっており、六〇年代以来の現象学的な鑑賞経験の問題を引き継いでいるとする立場があり、他方で、それは仮想的空間を作りだし、脱身体化、観者の否定に関わっているとする立場があった。投影像において、見る者

を置き去りにして鑑賞を拒むかのような現象は、イメージと、それと相対する観者の境位をどのように変容させているのか。果たして、投影像は、人間なしのイメージなのか。

このような問題を背景として、本研究室は第十回神戸大学芸術学研究会「投影像、あるいは脱身体のユートピア？」（二〇一五年十二月十二日、於神戸大学文学部棟B一三二教室）を開催した。ゲストとして本研究室出身で京都精華大学非常勤講師の唄邦弘氏、視聴覚文化研究者で滋賀県立大学の細馬宏通教授をお迎えし、これに本研究室の博士課程前期課程二回生である居村匠を加えた三名が発表をおこなった。居村は、ミニマリズムのアーティスト、トニー・スミスのよく知られた高速道路の逸話を端緒に、テクノロジーと結びついた観者のあり様について検討した。唄氏は、ランド・アートの代表的アーティスト、ロバート・スミッソンによる洞窟での映画上映「アンダーグラウンドシネマ」の構想を、《スパイラル・ジェッティ》をはじめとするスミッソンの映画的実践とのかかわりにおいて捉え直すことを試みた。細馬氏は、プレゼンテーションという慣習それ自体がいかに構築されてきたのかという点について、幻燈やヴォードヴィルといったもののうちにその萌芽を見出し、報告した。三名の発表の後、神戸大学人文学研究科の前川修教授の司会のもと、発表者による討議をおこなった。

本特集は、この研究会での各発表者の発表をまとめたものである。なお、細馬先生の原稿は、研究会での多岐にわたる興味深いトピックのうち、とくに旅行幻燈に焦点をあてたものとなっている。投影像における身体、スクリーンや、像そのものだけでなくそれを取り巻くスクリーン・プラクティスの問題など、今回の研究会はさまざまな課題が明らかになる契機であった。これを端緒とし、さらに議論を進めていきたい。